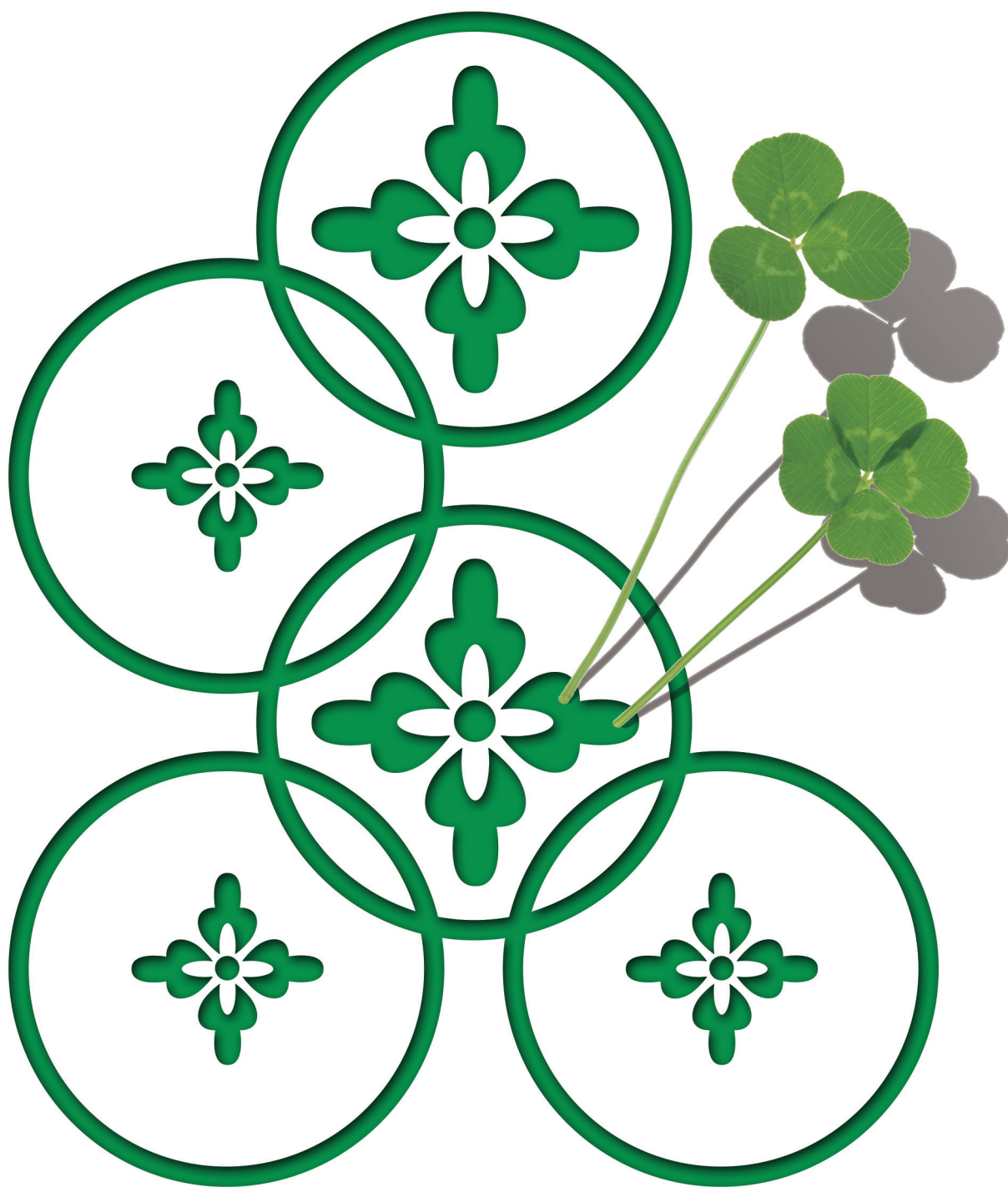




第23回ライフ・ラーニング・メンバーズ交流会 報告



↑博士号取得の方々。



↑来賓ご挨拶をいただいた遠藤啓様。

←ご挨拶をする理事
長・松田妙子。→伝統工芸作家
の方々をご紹介。↑篠笛奏者・こと
さんによる澄んだ
音色の演奏。今回も90名近くの
会員・関係者が集
まる盛会となった。

会場では財団の事業も紹介された。50歳以上の博士号取得支援事業では、これまで6年の歴史を刻み、346名が応募、49名が合格し支援に至った。今年も55名もの応募があり、審査中との報告が張競選考委員長からあった。すでに博士号を取得した22名の中から6名が登壇し、現況を語った。

本誌「日本の技」シリーズに登壇した伝統工芸作家から、坂和清氏（友禪染）、杉浦美智子氏（人形）、島崎敏宏氏（江戸指物）、岩田宏子氏（5月号登場予定、人形）も登壇。インタビューをした上野由美子氏が紹介し、「今後は英語でも、日本文化を世界に発信していきたい」と抱負を語った。

1月31日火に、恒例のメンバーズ交流会が霞山会館で行われた。財団理事長・松田妙子の「私は65歳で一番嫌いな勉強にチャレンジし、70歳で博士号を取得した。皆さんはぜひ楽しいことを見つけて生涯学習の輪を広げてほしい」との檄に対し、財団評議員の遠藤啓・文化学園大学理事は「ご挨拶の中で、「私も合唱を続けている。生涯学習の社会的課題としては、英語を活用して世界で活躍する人材の育成に取り組んでいる」と返した。

会半ばには篠笛奏者・ことさんが登場。まずは「早春賦」、続いて出身地広島的神楽から「八岐大蛇」などが透き通った音で演奏された。



西浦喜八郎氏の書



坂和清氏の東京友禪



会場全景
手前は中尾純氏の有田焼

パリ8区 区庁舎における JAPON : Épanouissement éternel 展覧会 [財団助成事業報告]

開催期間 2016年11月28日～12月7日
 展示内容 西浦喜八郎 (書)
 坂和 清 (東京友禪)
 中尾 純 (有田焼)
 村上三和子 (有田焼・絵付け)
 特別展示 西浦焼



主催者の①芝本氏 ②上野氏 ③西浦氏 ④金井氏らと、⑤財団佐藤

展覧会期間中、来場者は約400名に上った。今回の来場者の特性として、すでに日本文化に興味があり、基本的知識がある方が多いと感じられた。セーブル美術館、セルヌスキ美術館を始めとする美術館関係者、ギャラリーオーナー、陶芸家、画家など、アート関係者が多数来場していたこともあり、作家本人への積極的な質問がしばしば見受けられた。そうした作家との対話や西浦喜八郎氏の書のデモンストレーション、坂和清氏の染色のワークショップなどを通して、日本文化への造詣をさらに深め、また、映像作品と磁器の組み合わせや若手作家の展示などから、伝統文化だけではなく、日本の新しい感性にも興味も持っていたのだと思われる。

来場者から「展覧会を継続すべき」との声を多く聞いた

■日本文化への関心が高い来場者

本展を企画した〈技 collection〉(芝本久美子代表)は、日本の伝統文化や伝統工芸品を未来に繋げていく活動をする非営利団体。2010年以来毎年パリで展示会を行っている。16年は、パリ8区区長からの招へいを受け、また、在仏日本大使館の後援を得て、11月28日～12月7日、8区区庁舎にて展覧会を開催した。継承の危機にある日本の伝統工芸の現状を細かく調査研究し、その魅力が海外に紹介する芝本氏らの活動を、生涯学習開発財団が評価した助成事業でもある。

展覧会では、本誌にもご登場いただいた、東京友禪の坂和清氏、陶芸の中尾純氏、Nishina Styleの西浦喜八郎氏に、有田では珍しい女性の絵付師・村上三和子氏を加えた4氏の技と世界観が、パリの人々に発信された。

だき、より深く多角的な日本文化への学びを求める方が
少なくないことを確信した。

■作家にとっても気づきが

作家と来場者が直接コミュニケーションをとること
で、文化的な差異、技術的な共通点の発見など、作家と
来場者、双方に発見や学びがあったようだ。たとえば東
京友禅の坂和氏は、完成品の着物・帯以外に染色前の模
様のみの生地も展示し、制作工程を含めたより具体的
な解説を行った。その結果、繊細な絵柄や色彩を生み出す
技術にも多くの称賛が寄せられていた。参加者からは、
染色の技法の中に、ポーセリンアートと共通する技法が
見受けられるといった感想が出ていた。

12月1日に行われた染色のワークショップには、約20
名の参加者があった。フランス人はあまり細かい文様を
好まず、また、柄を左右対称に作る傾向があるなど、日
本人対象のワークショップとの違いがみられ、作家にと
っても新鮮な発見があったようだ。

■日本とフランスの雨の違いを楽しむ

村上三和子氏の作品は、雨の中に咲く花がテーマであ
った。天井に映した映像とコラボレーションをするとい
う初の試みを行った結果、フランスの雨と日本の雨の違
いを、視覚のみならず聴覚からも感じ取ってもらえる場
を設けることができた。

「日本の雨は、フランスの霧雨のような雨に比べて雨
粒が大きいのです」という説明を行うと、より村上作品
の中に描かれている雨の表現に興味が深まり、日仏の差
異を楽しむ来場者を多く見かけた。ポツポツ…から始ま
り、ザーッと大雨になっていく雨音。同じ「雨」でも、
表情が異なることは新鮮な発見であり、村上氏の絵付け
による巧みな花と雨粒表現によって、日本の自然の一端



11月30日には区長主催ヴェルニサージュが開催され、多くの美術関係者が来場。西浦喜八郎氏の書のデモンストレーションが行われ、その作品は8区の区庁舎に寄贈された。また、セルヌスキ・パリ市立美術館の希望により、中尾純氏の作品「青白磁面取花器」が収蔵作品となった。



■交流継続を望む多くのオファー

今回の大きな成果の一つに、今後に繋がるオファーを
何件かいただけたことがあげられる。サンジェルマンの
ギャラリーやロワールのお城での展覧会、隣国オランダ
での展覧会などだ。継続的に日本の工芸を紹介し交流を
重ねること、日本文化の魅力の浸透にとどまらず、双
方向の学びがより深まると期待できる。また、パリの陶
磁器美術館の技術者と交流する提案もあり、作家同士が
学び合う技術力向上の場となる可能性がある。

を疑似体験する感覚だっただろう。また、絵画や映画な
ど他の日本文化における雨の表現に関して、理解が深ま
ったとの声もあった。

「ディープ・アクティブラーニングと

ワークショップデザイン」

■深さを追求するフィンランドの学習

松下佳代氏の提案する「ディープ・アクティブラーニング」の定義は、「生徒・学生が他者とかかわりながら、対象世界を深く学び、自分のこれまでの知識や経験と結びつけると同時に、これからの人生に繋がっているような学習」。以前本シンポジウムに登壇された佐藤学さんの「学びの三位一体論」にも通じる。氏はフィンランドでディープラーニングを知った。フィンランドの高等教育では、①深い学習、②深い理解、③深い関与という、「深さ」を追求する学習が求められていて、「ディープ」という単語と「アクティブラーニング」が氏の中でクロスしたという。

氏は、課題をシナリオとして設定し教室外で資料を集め仮説を検証する、PBL (Problem Based Learning) の例を、蓮行氏とのシミュレーションを交え紹介した。

■大学入試にも『対話劇』を導入

平田オリザ氏が提唱・実施する「対話劇をしよう」という授業は、参加率が非常に高いのが特徴だ。演劇では「話さない」ということまで肯定され、個人の多様性を認めることができる。年号や基礎的な知識はすぐに検索できる現在、文科省の大学入試

改革に触れ、ハーバード大学で実施した「巨大な艦船をつくる」という入試や、四国学院大学で実施した「ディスカッションドラマを作る」という入試を紹介した。役割をうまく

分担できた者が高評価になる。氏は、小学生時代からアクティブラーニングをしているのか、文化資本に触れているか否かで、今後の大学入試でかなりの差が開くのではないかと考察している。

味覚・思考・芸術などの文化資本は20歳までに形成されるため、子どものうちに本物に触れる体験が重要という。ただ、東京では質の高い文化資本に触れることは比較的容易だが、地方では困難であり、地域間格差として課題だ。

岡山県奈義町は、2016年度から公務員採用試験に平田氏監修の演劇的試験を導入した。1人の職員が複数の役割を担い、



2016年12月25日 京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール

登壇：松下佳代 京都大学高等教育研究開発推進センター教授

平田オリザ 劇作家／劇団「青年団」主宰／大阪大学COデザインセンター客員教授

蓮行 劇団衛星代表／大阪大学非常勤講師／ワークショップデザイナー推進機構副理事長

上手な役割分担を求められる、地方ならではの取り組みだ。奈義町は、過疎化防止のための子育て支援にも力を入れ、合計特殊出生率2・81人を誇っている。

■中学生に「ワークショップ」をどう説明？

3氏の鼎談では、演劇とアクティブラーニングの関係が語られた。平田氏は、「演劇自体が協働的作業なので、協働性がアクティブラーニングに不可欠とするなら、演

劇的要素は欠かせない」と指摘した。

蓮行氏が、中学生に「ワークショップって何？」と尋ねられたらなんと答えるかと質問。松下氏は「参加者が何かをやる、たいていは一人ではなくて協働でやる」。平田氏は「たぶん、みんなでなんかやるんだよ」。もし大人に答えるなら、「参加型・双方向型・参加者の履歴を大切にすること」という3点を説明するとのこと。

■ワークショップは漢方薬

グループワークとして、「歩く&止まるゲーム」で8人組のグループに分かれ、講師への質問をグループ内で話して決めた。その一部を紹介する。

Q: 疲れ切った夫婦、不良の息子に効くワークショップはないか？

平田 ワークショップは漢方薬。疲れ切らない夫婦、ぐれない息子をつくることは可能だが、治療は専門家にお願しよう。

蓮行 看守の方から刑務所でのワークショップを教えてほしいと言われた。

Q: アクティブラーニングで教育された学生を、企業はどう受け入れるべきか？

松下 社会での仕事はたいてい共同で、そのためのアクティブラーニング。それが活かされない企業であるなら残念。

平田 せっかくコミュニケーション能力をつけても、入社して「空気を読め」という教育をされる。社内での不正や数値改ざんが長年続いていた大企業の例などは、まさにその縮図。最近では、ワークショップを取り入れる企業も増えている。